五家荘の植物
——石灰岩地の植物ノート(1)——

人吉高校五木分校　田　代　周　史

は　じ　め　に

熊本県には，およそ2000種の植物が産するといわれている．これらの植物は，その分布の仕方で３つに大別することができる．まず，天草に産する植物で，この中にはハママンネングサ，ヘゴなど，沖縄や台湾などと共通して分布する南方系の植物が目を引く．次に，阿蘇に産する植物で，タマボウキ，ヤツシロソウ，シオンなど大陸系の草原生の植物が多い．第３に，五家荘を含む九州中央山地のもので，キレンゲショウマやヤハズアジサイをはじめとする森林生の植物がある．ここは，他の２地域の植物に比べると，地史的に古くから陸地であったことを反映して，襲速紀(そはやき)要素をはじめとする日本固有種を多く産することが特徴としてあげられる．なお，襲速紀要素とは紀伊半島の紀ノ川・櫛田川以南，四国，九州南部の地域で分化した植物群のことを指す．

さて，五家荘には石灰岩の地層が発達し，数多くの露頭がみられる．このような環境は，１日の気温の差が大きく，乾燥しやすい．また，カルシウムを含むためアルカリ化するなど，他地域の森林内とは違った環境を呈している．そのため，この石灰岩地で独自に分化した植物や草原生の植物，遺存種などがみられるといった特色をもつ．そのようなことから，五家荘の植物に関する調査研究は，数多くなされてきている．しかし，調査地が地形複雑にして山深く，交通の不便さもあいまって，調査は容易でなく，断片的な資料に留まっている．本格的なものとしては，今江（1969）と今江・富田（1979）があげられるに過ぎない．とりわけ，石灰岩地の植物に関する報告は，五家荘と隣接する五木村の特殊植物として今江（1979）に，熊本県南部の石灰岩地帯の植物として清水（1960）に記載されている程度である．

それで今回は，著者が1985年から1990年にかけて，五家荘南部を中心に調査した資料をもとに，石灰岩地の岩峰だけに生育する植物について焦点を絞って述べてみたい．

調査地点の地質について

五家荘は，北東から南西に走る中央（臼杵－八代）構造線とその南側の大坂間構造線とに挟まれ，これらの構造線に沿っていくつもの地層がほぼ平行に走っている．大部分が，古生界二畳系（２億8000万～２億2500万年前）の地層で，ここにフズリナやメガロドンの化石をともなった石灰岩の層が分布する（図１の黒塗りの部分）．なお，今回調査した石灰岩峰は神ノ瀬層に点在している．

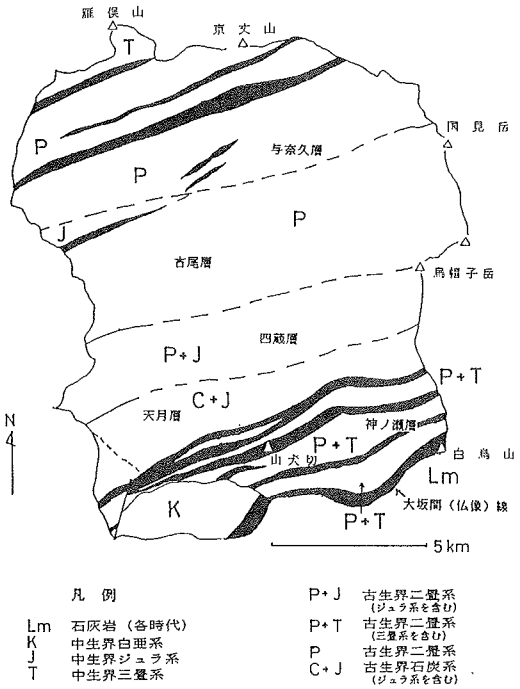

図１．五家荘における地質略図（熊本県版熊本県地質図をもとに著者作図）

植物について

イチョウシダ（チャセンシダ科）

山地の石灰岩上だけに生育するシダ植物で，北海道から九州まで分布する．県内では五家荘でのみ確認されて

いる．個体数が非常に少なく，調査地でも2カ所でしか確認していない．以前からその存在が知られていた五家荘のシラカワ谷では，道路工事のため生育地が削り取られ，残念ながらその一帯では絶滅したようである．

クモノスシダ（チャセンシダ科）

おもに山地の石灰岩上に生育するが，安山岩その他の岩上にもみられるシダ植物で，北海道から九州まで広く分布する．県内では数カ所で確認されている．上記のイチョウシダが向陽地を好むのに対し，本種は森林内のやや暗いところに生育し，個体数も多い．

ヒゴイカリソウ（メギ科）

分布が，宮崎県と熊本県に限られている固有種．球磨村渡が原標本産地である．以前は大分県でも産するとされていたが，大分県植物誌（1989）ではイカリソウとして記載されている．しかし，その分類に関する記載がないのでヒゴイカリソウとの違いは，今のところ不明である．石灰岩地帯に分布することが知られているが，県内では必ずしもそうではない．例外的に，火山岩地帯の阿蘇の草原でも生育している．

イブキシモツケ（バラ科）

山地の日当りのよい岩れき地に生える落葉低木．石灰岩・蛇紋岩・安山岩などの地帯によく分布する．本州・四国・九州・朝鮮半島・中国大陸に分布し，このうち九州では長崎県と鹿児島県を除く各県に産する．熊本県では，宮原，釈迦院・権現山，球磨，仰烏帽子山，五木，芦北，姫戸に産する．一般に，葉の裏面に毛が密生するが，この地域のものは葉の裏面に毛がないタイプとまばらに生えるタイプがある．その分布は，石灰岩地ごとに異なり，位置的に無毛，微毛と連続した形で変化している．また，宮崎県植物誌によると，白岩山と洞岳に産するものの中にも，葉脈上に毛があるものの他に，両面全く無毛のものがあると記されている．今後，この毛の変異については本格的な研究を行う価値があると思われる．

イヌトウキ（セリ科）

石灰岩の斜面に生える多年草で，本州（紀伊半島）・四国・九州に分布するいわゆる襲速紀要素である．県内ではこの変種のクマノダケもあり，やはり石灰岩地のみに産する．今江（1979）によると，イヌトウキは五木村や泉村の和小路にあり，クマノダケは熊本県南部に産し，仰烏帽子山の記録がある．また，九州他県の植物誌によれば，イヌトウキは大分県と鹿児島県の甑島で，クマノダケは宮崎県椎葉・大河内で確認されていることから，五家荘が両者の分布の境界になるのではないかと思われる．しかし著者は，五家荘ではイヌトウキを1個体しか確認していないので，今後この両者の分布については，さらに調査を進めていきたい．

ハナイカリ（リンドウ科）

1985年9月16日に採集した熊本県新産の植物．朝鮮から東シベリア・欧州まで広く分布し，国内では北海道から九州までの日当りのよい山地に生えるとされている．ところが，九州各県の植物誌には記載がなく，今回の採集によって九州に産することが改めて確認された．

イワギク（キク科）

山地の岩場に生える多年草で，本州・四国・朝鮮・中国・シベリア・カルパチアに分布する大陸系の遺存植物である．県内では，仰烏帽子山と五家荘の石灰岩地でしか確認されておらず，個体数は非常に少ない．

ブゼンノギク（キク科）

四国の蛇紋岩地に生育するヤナギノギクの亜種で，分布は九州に限られている．佐賀県植物誌では生態については記されておらず，検討の必要有りとされている．大分県では低地や丘陵地の岩場に生育しているという．熊本県では，五家荘・又志谷で富田（1979）が確認しているが，その標本と，今回得られた標本は，どちらも本種と形態的にわずかに異なっているようである．今後，検討していく必要がある．

ヤハズハハコ（キク科）

山地に生える多年草で，本州（関東地方以西）・四国・九州・朝鮮・旧満州・中国に分布する．九州では，宮崎県の洞岳や白岩山，熊本県の山江に産し，いずれも石灰岩地帯である．個体数が非常に少なく，五家荘の石灰岩地帯でも珍しい種である．

以上の他にも，日本固有種のミヤマビャクシン，ツクシクサボタン，シギンカラマツ，シコクハタザオ，草原生植物のカラマツソウ，フナバラソウ，その他ツルデンダ，ミヤマカラマツ，キリンソウ，シオガマギク，キヌタソウ，ソバナ，ヤマボクチ，イヌヨモギなど石灰岩地特有の植物を確認している．

おわりに

以上，石灰岩峰に生育することが今回確認できた植物をあげた．どの種も，県内においては分布が稀な植物であり，石灰岩地以外ではあまり確認されていないものがほとんどであった．

今後は，石灰岩峰を調査するとともに，さらにウラジ

ロウコギやザリコミ，ヤマトグサなどが生育する岩峰以外の石灰岩地も調査対象にし，より深く検討していきたい．

引 用 文 献

今江正知．1969．人吉，球磨，五木，五家荘地区の植物について．人吉球磨五木五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書．37-66．熊本．

——．1979．五木村の植物．川辺川流域総合予備調査報告．31-44.川辺川流域総合予備調査団．熊本．

——．富田壽人．1979．五家荘又志谷一帯の植物．BOTANY．40号．79-112．

清水建美．1960 a．熊本県南部における石灰岩地帯の植物Ⅰ．植物分類地理18．117-128．

——．1960 b．熊本県南部における石灰岩地帯の植物Ⅱ．植物分類地理18．161-168．

松本唯一．1963．熊本県地質図説明書．熊本県商工水産部工鉱課．